

平成 22 年 4 月 26 日現在

研究種目：若手研究 (B)
 研究期間：2007 ～ 2009
 課題番号：19730413
 研究課題名 (和文) 大学教育がもたらす統合的読解力の発達過程の解明—新聞からの世界認識形成を中心に
 研究課題名 (英文) Developmental process of university students' integrative reading ability: Building a view of the world from articles of newspapers
 研究代表者：西垣 順子 (NISHIGAKI JUNKO)
 大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授
 研究者番号：80345769

研究成果の概要 (和文) : 大学生に求められるアカデミックリテラシーのうち、読みに関わるものを統合的読解力と呼びその発達過程を検討した。当初は新聞を使った読解力の分析を行ったが、新聞をどのように読むかについて学年による違いはほとんど見られなかった。つまり、授業等で獲得する読解方略が授業場面を離れた状況には反映されにくい状況が明らかになった。そこで、心理学、言語学、教育哲学によるリテラシー研究をレビューしなおし、アカデミックリテラシーの意義を学生の生涯発達の観点から位置づける論点整理を行った。

研究成果の概要 (英文) : Developmental process of integrative reading comprehension, which corresponds to the reading in academic literacy in university learning, was explored. The analysis of the process of reading newspapers was first carried out, but the way how to read newspapers did not differ depending on the length of university learning. It could be concluded that reading strategy which students use in classes did not used in their more daily reading activity. I reorganized the issues of academic literacy from the perspective of making the foundation of students' life-long development through the review of studies in psychology, linguistics and philosophy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	480,000	3,180,000

研究分野：教育心理学・大学教育学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：アカデミックリテラシー・読解力・大学生・思考力・生涯発達の基盤・大学教育

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始する前に、本研究代表者は大学生のアカデミックライティングの発達について検討をしていた。その研究過程におい

て、書く前の段階としての「読み」にも注目した研究を行い、大学生のアカデミックリテラシーの発達を解明する必要があると考えた。つまり書くことと読むことはセットで考

える必要があり、それを研究単位としなければならぬと考えた。そこで本研究ではまず、複数の異なる文章情報をもとに未知の領域について体系的な世界認識を形成するプロセスとしての統合的読解力の発達と教育の在り方について研究をすることとし、さらにアカデミックリテラシー全体の発達とそれを促す大学教育のありかたを検討することとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学教育でこそ重要な統合的読解力の発達過程を解明することであった。統合的読解力とは、学生が文章から情報を入手し、未知の分野や馴染みのない分野に関する世界認識を構築するとともに、自分自身の先入観を相対化できる読解力のことである。また本研究では、大学教育の方法論とカリキュラムが統合的読解力の発達の成否にどのように影響するかを明らかにすることも目的としていた。

3. 研究の方法

本研究は、主に次の3つの研究方法によって実施された。

1つめは新聞を読むときの読解方略についての質問紙調査や、学生自身の先入観と一致／不一致の情報を含む文章の読解状況を調査することで、学生が複数の情報源を統合的に理解したり、自分自身の先入観を相対化するような読解をどのような経過で行えるようになるかを明らかにすることであった。

2つめは、統合的読解も含めたアカデミックリテラシー全般について、その役割と意義（特に学生の生涯発達の基盤形成という視点からの意義）を学生自身の視点から検討するために、アカデミックリテラシーの教育に関連する先行研究を、心理学のみならず、言語学や教育哲学、さらには教育の質保証を中心とする教育政策までの幅広い領域でレビューした。

3つめは、学生自身がアカデミックリテラシー活動について、特に自分自身の生涯発達の基盤形成という側面からどのように理解しているかを明らかにするために、学生の自己評価と教員による評価の相違を分析した。特に、読んだ文献と自分自身の思考の統合、及び書くことを通じて自分自身で思考を深めていくことについて、学生がどのように認識しているかに注目した分析を行った。

4. 研究成果

本項では、上記「3. 研究の方法」で述べた3つの方法のそれぞれについて、研究成果を概説する。

(1) 統合的読解力の発達変化に関する調査

結果

新聞の読み方に関する質問紙調査を、大学生152名を対象に実施した。新聞を日常的に利用している学生の割合は4割程度で低くはなかったが、記事同士の関連から未知の領域についての体系的な世界観を構築していくような読み方をしている学生は少なく（全体の1割弱程度）、学年進行による違いも見られなかった。

さらに、学生自身の先入観と一致する情報と一致しない情報の両方を含む文章の読解成績についても調査を行った。主張・根拠・反論・反論への反駁という構造をとる文章の場合、読者である学生の先入観と一致する情報と一致しない情報の両方が含まれる。それらの情報の記憶成績等を調査したが、読解状況に違いは見られず、学生は自分の先入観と一致する情報も一致しない情報も等しく理解をしていた。

これらのことから、大学生は調査場面では自分の信念と一致する情報と一致しない情報の両方を批判的に吟味して理解することができるが、そのような読解方略を調査場面以外の状況では積極的には応用しないことが示唆された。

(2) アカデミックリテラシーに関する諸研究のレビュー

「4. 1.」の結果（使える方略を使わない、その結果、方略が成熟しない）の背景を解釈するためには、アカデミックリテラシー活動の意義を学生の視点から再解釈する必要があると判断し、先行諸研究を改めてレビューしなおすことにした。つまり、本研究の開始時点では、アカデミックリテラシーは社会でも大学でも要求されるものであり、学生の成長にも必要なものと理解していたが（その理解自体は変わらないが）、それを学生がどのように捉える可能性があるかを改めて検討する必要があると判断した。

大学教育をフィールドとした心理学研究でアカデミックリテラシーが扱われる場合、学生のスキルや行動ではなく認知過程に注目が集まる。学習方略等の教授実験は、多くの場合良い成果を上げている。しかしその一方で、学生自身が「大学での読み書きによって自分の思考が深められる」という実感を持っていないことも明らかになった。それどころか、教授実験終了後の学生の認識が「アカデミックリテラシー活動においては自分の考察は抑制すべき」という方向により強く変化していることもあった。

言語学領域では、ヨーロッパを中心に1990年代終盤からアカデミックリテラシーズと呼ばれるアプローチが盛んになった。日本にはほとんど紹介されていないようだが、アカデミックライティングが大学内で実際には

多様な形をとっていること、学生にとっては「新しい言語での表現」を求められるという意味で彼ら自身の人格の変容を伴うプロセスであることを主張している。アカデミックリテラシーアプローチは、それまで研究者や教育者の意識に上っていなかったアカデミックリテラシーの側面を明らかにしたという意味で意義がある。しかし、それを教育に応用する際には、「場面ごとに細かな指示を学生に与える」ということにとどまる傾向が顕著であり、学生の思考を深めるに至らないという限界もある。

教育哲学でもアカデミックリテラシーの在り方が検討されており、昨今の大学で主流のアカデミックリテラシーが歴史的には暫定的な位置づけでしか理解できないことなどを明らかにしている。また、アカデミックリテラシーのような読み書き活動は、学生自身の人格の変容を伴うような深いものである必要があること、そのためには、効果的に読み書きするよりも、よりゆっくりと丁寧に読んだり書いたりする（非効率的な）作業が必要であることなどが主張されている。

他方で、昨今の大学教育の質保証や教育成果（アウトカム）ベースの大学評価を推進する動きの中で、アカデミックリテラシーは批判的思考力などと並んで注目を集めている。しかし多くの場合、リテラシーを単純にスキルの獲得と捉えている場合が多いなど、心理学・言語学・哲学の研究成果とは矛盾するところもある。また、質保証の議論は半ば強制的なポートフォリオの作成と保存に代表されるように、学生に多くの事柄（学習の記録など）を書くことを求める。しかし、思考を深めるためには単に量を書けばよいのではないことから、これらの動きもアカデミックリテラシーの発達を阻害する動きになってしまいかねない恐れがある。

これらのことをまとめると、アカデミックリテラシーの研究をさらに深めるためには、アカデミックリテラシーが展開される場である大学において、そこでの学業を通じて達成される大学生の発達とは何かをまずは検討し、その文脈においてアカデミックリテラシーが果たす役割を明らかにしなければならないと言える。

そこで本研究は、大学教育における学生の発達を「生涯発達の基盤形成」と捉え、アカデミックリテラシーは学生自身の世界観を、学問を通じて構築・再構築するための手段であると位置付けた。そして心理学研究としては、学生自身が実際にどのように、学問を通じて世界観を構築・再構築しているのかを丁寧に、実証的に分析していく必要があると考えた。この結論はまさに新たな問題設定でもあり、新しい研究プロジェクトの立ち上げを必要とするものでもある。しかしその前に

本研究において、まずは学生自身がアカデミックリテラシーの意義をどのように理解し評価しているか、その認識を調査することとした。

（3）学生の自己評価と教師評価の比較

学生がレポートを書く際に、文献情報の統合的読解とライティングへの反映状況、及びレポート執筆を通じて自分自身の先行世界観を再構築するプロセスをどのように評価するかを明らかにするため、学生自身に自分のレポートの自己評価をさせ、それを教師の評価と比較した。

文献情報の統合的読解とレポート執筆への反映は、具体的にはレポートにおける文献の引用の適切さに現れる。引用の適切さに関する評価は、自己評価と教師評価の一致度が高く、自分の思考を他者（先行研究の研究者）の思考と関連させて統合的に深めるとはどうかにかつて、学生は一定程度理解していると考えられた。しかしその一方で、引用の適切性の成績は、第1回レポート課題より第2回レポート課題の成績が低くなっていた。つまり、学生の能力は、実際に適切に統合的読解を行いレポート執筆に反映させられるように、順調に発達するのではなく、課題の性質（先行研究の探しやすさ）やレポート執筆の状況（時間的余裕など）によって変動をすることが示唆された。

レポートの中で自分自身の考察がどの程度深められ、表現されているかに関する学生の自己評価は、学生自身がその評価規準について曖昧な認識を持っていることを示唆するものであった。

まず（レポート課題は2回あったのだが）、レポートへの考察の執筆状況について自己評価が高い学生の教師評価成績は、第1回レポートでは高かった（つまり自己評価と教師評価が一致していた）が、第2回レポートではそのような連関が見られなかった。つまり、考察の記述状況についての学生の自己評価と教師評価の間には、一貫した連関が認められなかった。

その一方で、考察の記述状況に対する教師評価は第1回レポートよりも第2回レポートのほうが高く、授業での指導を通じて学生が自分自身の考察を表現する傾向そのものは強まっていることが示唆された。しかし、学生自身のレポートへの総合評価（自己評価総合）は第1回レポートより第2回レポートが高い（学生はレポートの出来により自信を持っている）にも関わらず、考察の記述状況に関する自己評価そのものは第1回レポートと第2回レポートで違いが見られなかった。つまり、学期末時点において学生は、レポートがよりうまくかけたと認識しているにも関わらず、それを「考察の記述」には帰属して

いなかった。さらに引用の適切性の向上にも帰属していなかった（実際のところ引用の教師評価成績は低下していた）。

さらに、総合的自己評価の結果をもたらした原因（執筆経験の多寡や文献をうまく見つけられたかどうかなど）についても質問をしたが、この回答に顕著な偏りや傾向（評価が高い学生と低い学生の違い）は認められず、第2回レポートがうまくかけたと判断した学生において「執筆時間を確保できた」と答えた学生が多い程度であった。

以上をまとめると、学生自身が「良いレポート」とは何かに関して持っている規準は相当に曖昧であること、特に考察を深めて書くという点については、「書くべきか書かざるべきか」について様々な状況に応じて複雑な判断（反応）をしている様子がうかがえた。ただその一方で、第2回レポートでは執筆時間の確保に成功している学生が多めであったことなど、レポートを書くという作業そのものに向き合うための環境づくりのために適切な行動をとれるようになる傾向はみられたことから、学生は実際にレポートを書きながら（結果のフィードバックなども受けながら）アカデミックリテラシーとして求められるものは何かについて理解していくものと考えられ、その理解は状況等に応じて変動する複雑なプロセスをたどるものと推測される。

（4）全体考察

ここまでで報告してきた研究成果を改めてまとめると、次のような結論を導くことができる。

第1に、統合的読解力も含めたアカデミックリテラシーの発達を研究するには、「アカデミックリテラシーは重要な認知能力である」という観点（機能的リテラシー的観点）から出発した研究では不十分であり、リテラシーの意義を学生自身の視点から考え直す必要があるということである。これは、学生がどう考えているかを聞けばよいという単純な意味ではない。リテラシーの意義を明確にするのは研究者であり教育者であるが、それを学生の立場と視点に立って検討するということである。教育者として学生に期待することと、学生自身が望むことの間には交差点を見つけないといけない。本研究ではそれは、生涯発達の基盤を授業を通じて形成するために、学生自身の世界観を再構成するための有力な手段としてアカデミックリテラシーを位置付けるということであった。そしてそのような位置づけから考えられたアカデミックリテラシーの発達を研究するためには、効果的な読み書きにとどまるのではなく、非効率的に見える読み書き行動も含めたリテラシー行動の意味も再検討することが

必要と示唆された。

第2の結論は、第1の結論（論点）について現時点で明らかになっていることは、学生は思考を深めるために書き、それを表現することについて、複雑な認識を持っており、実際のレポート執筆において思考錯誤を重ねているということである。学生自身が思考を通じて作り出す「知識」は、研究者がアカデミックな研究を通じて作り出す「知識」とは質が異なる。後者のような「知識」を正解と考える空気の中で（実際の社会生活においてはそれが適応的であることは圧倒的に多い）、自分が作り出した「知識」を表現するには大きな抵抗を越えなければならない。そして大学生活の中では、その抵抗を軽減させる作用と強める作用の両方が存在する。そのことが結果として、学生のリテラシー発達の様相を複雑にしていると考えられる。

第3の結論は、残された今後の研究課題は何かということである。特に心理学研究の果たすべき役割として考える場合、必要なことは実際に授業の中で、学生がどのように思考し、それを書くのか（書かないのか）について、いくつかのディシプリンの授業をもとにデータを蓄積して分析することである。心理学研究の強みは、実際の学生のリテラシー活動を分析することと、学生自身の発達という視点から検討を行えることであり、それらをもとに教育方法の提案ができることであると言える。だがそれらは、心理学の授業やライティングスキル教育のみを素材にしては不十分である。より幅広いディシプリンでのデータの蓄積と分析により、大学授業を通じた学生の生涯発達の基盤形成という視点に立ったアカデミックリテラシー教育の可能性が広がることになるだろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 西垣順子、初年次学生の議論型ライティングに関する認識について、大阪市立大学「大学教育」、査読有、第6巻、2008、pp. 21-28.

〔学会発表〕（計4件）

- ① 西垣順子、「学士課程教育におけるアカデミックリテラシー教育の可能性—教育心理学・発達心理学からの研究の可能性と方向性に関する検討」教育心理学会第52回総会、2010年8月27-29日、早稲田大学（予定）
- ② Junko Nishigaki, The possibility of academic writing / academic writing education to create students' development: Exploring the future direction of developmental psychology research, CHES Seminar (Center for Higher Education Studies), 2010年3月23

日, Institute of Education, University of London (招待講演)

- ③西垣順子、学生の基礎学力をどう育成するかー読み書き能力を中心として、相愛大学 FD 研修会、2010年2月22日、相愛大学(招待講演)
- ④西垣順子、「授業の中で学生の何が育てられているか」、第15回大学教育研究フォーラム、2009年3月21日、京都大学
- ⑤西垣順子、学士課程教育における「書くこと」の意義とその指導ー学生は書くことでどう育つのか、追手門学院大学教育研究所第6回定例研究会、2008年12月19日、追手門学院大学 (招待講演)
- ⑥西垣順子、「書くこと」で学生はどう育つのか? 関西地区 FD 連絡協議会・FD 連携企画 WG 第1回シンポジウム「思考し表現する学生を育てるー書くことをどう指導し、評価するか?」2008年11月29日、立命館大学衣笠キャンパス (招待講演)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西垣 順子 (NISHIGAKI JUNKO)

大阪市立大学・大学教育研究センター・准教授

研究者番号：80345769